

迷子

「生き抜く力」といっても、私はまだこの世に生まれて、十三年ぼっち。その中で唯一例を挙げるとしたら、まだまだ記憶に新しい四か月前のあの日になるだろう。これは、私達が学校行事として、大阪市内へフィールドワークに行ったときの話である。

私達は、少し道に迷っていた。それまでは事前の入念な調査のおかげで、予定通りに進んでいたのだが、先生からも「難しいよ」と言われたこの場所は、やはりすんなりとはいかなかった。少しがっかりしたが、仕方ない。

「ちょっと、地図かしてみ。俺やったら分かるから」と、班長が言った。

ほんまかいな、と内心思ったが、班長の勢いに負け、持っていた地図を手渡した。どれどれといった様子で地図を開く。しばらく考えた後、あっちゃやって、と指差した。全く信用できないが、どうすることもできず、後についていくしかない。その後も班長の指示に従い歩いてく。しかし、私はここでふと気がついた。さっきから同じところばかり、ぐるぐる回ってる。歩き始めて、一時間程たったころだった。私たち、完全に「迷子」だ。そう気づいたとたん、無情に恥ずかしくなって、その場から走り出したい気持ちでいっぱいになった。次から班長を決めるときは、ジャンケン以外の方法で決めよう、と心にちかった。

そのころ、他の班員も同じことに気づいたらしく、どうしようかと話し合った。そして友人の意見で、近くの駅に戻ることになった。班長がたっぷり説教されたのは、言うまでもない。駅に戻る道中、なんだかさみしく、とぼとぼ歩いていた。ふと顔を上げると、私のははつとした。班長から強引に地図を奪った。目的地への目印となる建物を見つけたのだ。

「あれや!」と、私は跳ねて喜んだ。うれしくてうれしくて、たまらなかった。

私たちは駅に戻ったから目的地へ行けた。それと同じように、生き抜くためには、一度戻って考えることも大切なかもしれない。